

魚市場の活気を都心に残す

二条市場

「いらっしやい。いいカニあるよ」中に入って見ていって」と威勢の良い掛け声が響く。こんな昔ながらの光景を都心に残す二条市場を紹介しませう。

狸小路を東に向かい、創成川を渡ると、明治時代から続く昔懐かしい雰囲気の魚市場が、道行く人を迎えます。ここが「二条市場」という通称で定着するようになったのは、昭和に入ってから。かつては、「二条魚町」と呼ばれ、現在も正式名称は「札幌二条魚町商業協同組合」といいます。

この市場が生まれたきっかけは、明治初期に石狩浜の漁師が石狩川を上って札幌に入り、鮮魚を売り始めたことといわれています。初めは、創成川を行き交う搬送船の荷の積み下ろしをする人たちを相手に商売をしていました。当時は、商店の数が十三軒であったことから、「十三組合」と呼ばれたそうです。こうして自然に発生した市に転機が訪れ、現在の

ような魚市場が形作られたのは、明治三十六年（一九〇三年）。その前年の大火事で、この一帯が焼失しましたが、苦勞の末、魚市場があらためて建設されると、

以前にも増してにぎわうようになりました。

四十三年（一九一〇年）には、東一丁目だけでなく、二丁目まで店が並ぶようになり、周りには魚屋のほか、旅籠屋、五銭ソバ屋、居酒屋も現れ、今日の二条市場の基礎がつけられました。

戦後は、さらに乾物屋や惣菜屋などの店も加わりました。現在は中通に野菜・加工食品の店が集まる「新二条市場」もあり、店舗は約五十軒あります。市民だけでなく、観光客にもよく知られるようになってきた二条市場。今も多くの人々が訪れ、にぎわいを見せています。



昭和30年ころの二条市場
(札幌市教育委員会文化資料室所蔵)

(平成十二年十月号・第七十二回)